

東京湾内における釣り場環境の実態に関する研究

東京農業大学地域環境科学部 ○荒井 歩
(株)岩崎産業 春日 章宏

key words : 海釣り場, 施設, 海釣り公園

1. はじめに

釣りは老若男女問わずに楽しめるレジャーのひとつである。特に港湾構造物からの海釣りは、比較的簡単に出来る釣りとしてその愛好者も多い。さらに昨今のアウトドアブームやルアーブームと相まって海釣り人口は増加しており、この動きは多様な釣り場への要求につながると思われる。そこで本研究では、今後の海釣り場整備のためには現在どのような環境で海釣りが行われているのかを把握する必要があると考え、主に施設環境の側面から東京湾内の釣り場の現状を整理し、その問題点を考察した。さらに現在港湾局が推進している海釣り公園および海釣り施設（以下海釣り公園）が従来の問題点にどのように対処しながら多様化する釣り場のひとつとして新しいスタイルを確立しえているのかを検証した。

2. 東京湾内における海釣り場の現場

(1) 調査対象地

釣り場とは対象魚のいるポイントがある場所を指し、釣り人は釣り情報誌等から釣り場の情報を得て釣行へと向かう。そこで釣り情報誌から現在東京湾内（神奈川県横須賀市観音崎～千葉県富津市富津洲）にある釣り場を検索したところ 139 ヶ所の釣り場が確認できた。¹⁾²⁾³⁾⁴⁾周辺土地利用の違いによる釣り場環境の相違が想定されたため、さらに情報誌の区分を参考に東京湾をA地区（横須賀市～横浜市）、B地区（川崎市～江東区）、C地区（江戸川区～千葉市）、D地区（市原市～富津市）の4地区に分類した。

(2) 調査方法

港湾構造物の形態によって潮流、海底等の自然条件が異なり、それに従い対象魚にも差異が生じる。そこでまず各釣り場の港湾構造物形態を港湾法の施設定義に従って、構造物のない自然海岸（タイプ1）、沖堤（タイプ2）、埠頭や護岸（タイプ3）、防波堤（タイプ4）の

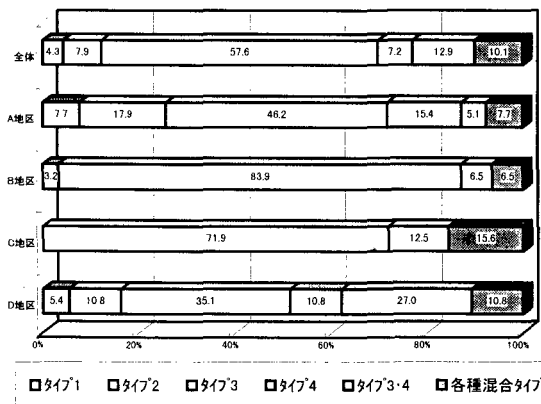


図-1 港湾構造物にの形態による釣り場の分類

4タイプに分類した（図-1）。⁵⁾さらに施設面から釣り場環境を把握するために情報誌のデータを用いて、各釣り場における交通手段、駐車場の有無、港湾施設を利用する他の活動との関係、危険を伴う釣りポイントの有無を整理した（図-2、図-3）。最後にマリンレジャーの活動条件として挙げられている6項目（①安全性、②快適性、③利用性、④安定性、⑤経済性、⑥景観性）を活用して、整理結果の分析を行い、釣り場の問題点について検討した。⁶⁾

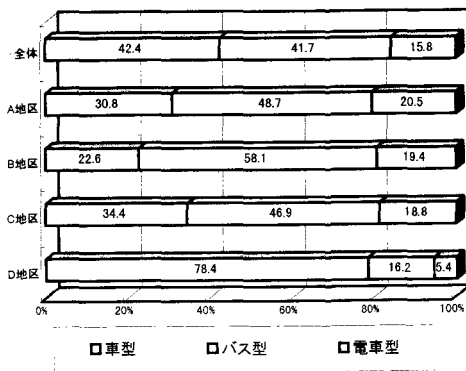


図-2 釣り場への交通手段

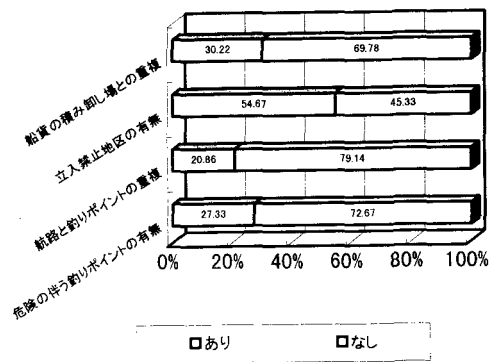


図-3 港湾構造物における利用の重複の有無

(3) 港湾構造物の形態による分類

全釣り場の約 60%は埠頭や護岸(タイプ 3)が占めている。河口部や港内、埋立地の釣り場の多くはタイプ 3 となること比率の高さにつながっている。タイプ 3 におけるポイントは自然条件も汽水域、海水域等と多様性に富むため、サズキ等も釣れ、初心者やルアー使用の釣り人でも楽しめる釣り場である。また各地区毎にタイプの割合は異なり、タイプ 2、3 の釣り場は潮目が望めるため、マガジやカダイ等の格好のポイントとなり、A、D地区には釣果狙いの釣り人が遠方から釣りに訪れる可能性が高いといえる。

(4) 釣り場の施設状況

- 1)交通手段と駐車場の有無：交通手段で釣り場を電車型（駅から徒歩 10 分圏内に釣り場がある）、バス型（最寄りの駅からバスでアプローチする）、車型（交通の便が車しか無い）の4つに分類した。その結果電車型は 15%程度に過ぎないが、車型、バス型は共に 40%以上の値を示した。一般的にも釣り場への交通手段に車を利用する人が多いため駐車場の有無を調べた。すると駐車場および駐車出来る代替地を釣り場近辺に有している所は全体の 12%にすぎず、多くの釣り人が路上駐車等をしながら釣りをしていることが推察された。
- 2)船貨の積み卸し場との重複：船貨の積み卸し場を釣り場として利用している所は 14.4%と少なかったが、積み卸し場での釣りを禁止している所も 15.8%あり、実際は積み卸し場で釣りをを行う人がいることが推測された。
- 3)立入禁止地区の有無：釣り場の中に私企業地等の立入禁止地区があるところは 54.7%と過半数以上を越えている。ポイント間の移動で立入禁止地区を通過したり、立入禁止地区内で釣りを行った結果、敷地管理者とのトラブルを引き起こしていると考えられる。
- 4)航路との重複、危険地点の有無：海域では航路に釣りのポイントがかかっている所が 20%存在し、船のスクリューに釣り糸が絡まる等の事故が危惧される。また足場の悪さや高波の危険が伴う釣り場も 27.3%確認できた。

(5) 海釣り場の問題点

以上の結果をマリンレジャーの活動条件に沿って分析すると、安全性と利用性に特に問題があることが考えられた。釣り場として活用している港湾施設は港内の静穏確保や積卸しおよび乗降が本来の目的であるため、釣り人の安全性や利用性に考慮されておらず、

またその義務もない。基本的に釣り人個人が責任を持ち、マナーある行動すれば現在の釣り場でも楽しめる。しかし家族連れや女性の釣り人の増加により、手すりや足場の整備といった基本的な安全性が確保されている釣り場やトイレ、駐車場、売店等の施設が設置された利用性の高い釣り場の需要が高くなっていることも事実である。実際情報誌で「家族連れ向けの安全な釣り場」として紹介されている、園内から釣りが可能な公園 19ヶ所（海釣り公園除く）の釣り場環境は、交通手段で電車型が 47.4%、駐車場設置が 63%、危険の伴う釣り場 15.8%と安全性、利用性に配慮されている釣り場であった。

3. 海釣り公園の釣り場環境

(1) 海釣り公園の概要

東京湾の釣り場における問題点として明らかとなった安全性と利用性に考慮しながら、快適性、景観性、経済性にも配慮した釣り場を目指しているのが現在東京湾内に7ヶ所存在する海釣り公園である（表-1）。防波堤や護岸に柵等を設置して改良したり、釣り専用の棧橋を設ける等安全性に重点をおいている。全ての公園で駐車場を完備しているが、交通手段としてバスでのアプローチも可能な所が多い。管理者が配置されている所も多く、人が多い時は入場制限、悪天候の時には入場中止を行う。従来の釣り場にはなかったトイレや売店、緑地も設置されている。また陸域の管理と平行して、魚礁の設置や、海底への砂散布等の海域での管理を行い、釣り場の安定性を心がけている。一部の公園では入場料を徴収しており収益は釣り場の管理にあてている。管理者を地元雇用している公園も存在する。

(2) 海釣り公園の利用状況調査

次に海釣り公園が概要通りに問題点に対処した釣り場として利用されているのかを利用実態調査によって確かめた。本牧海釣り施設（タイプ 3+4）、川崎浮き島つり公園（タイプ 3）、若洲海浜公園（タイプ 4）を調査対象として公園利用者にアンケート調査を行った。設問は、交通手段、来園・帰宅時間、来園者構成、施設に来た理由等から構成した。調査は1996年8月～10月にかけて行なった。

- 1) 回答者の概要：回答者は本牧海釣り施設（以下本牧）41名、川崎浮き島つり公園（以下川崎）31名、若洲海浜公園（以下若洲）25名の計97名である。各公園とも10代から60代以上までと幅広い年齢層に利用されていた。
- 2) 交通手段：各公園とも利用者の多くが釣り場の設置された市・区、または隣接する市・区からの来訪である。本牧では来訪者の49%が横浜市民、川崎は川崎市民35%、横浜市民23%、若洲は東京23区民44%という値となった。近隣からの来園者が多いにも関わらず、交通手段としては各公園とも車の利用が約80%であった。

表-1 海釣り公園の概要

公園名	ブロック	タイプ	開園時間	料金	駐車場	交通手段	売店	管理棟	トイレ	緑地	入場制限
横須賀海辺釣り公園	A地区	3	7:00-21:00	無料	○	駅から徒歩5分	○	○	○	○	200人
磯子海釣り場	A地区	3	8:00-18:00	300	○*	駅からバス	○	○	○		—
本牧海釣り施設	A地区	3+4	6:00-19:00	900	○	駅からバス	○	○	○	○	700人
大黒海釣り公園	A地区	4	6:00-19:00	無料	○	駅からバス	○	○	○	○	300人
川崎浮き島つり公園	B地区	3	24時間	無料	○*	駅からバス			○*		—
若洲海浜公園	B地区	4	6:00-21:30	無料	○	駅からバス	○	○	○	○	—
市原市海釣り施設	D地区	4	6:00-19:00	820	○	車	○	○	○	○	300人

- 3)来園および帰宅時間：魚の動きが活発になる時間帯と合わせて、通常の釣り場では早朝から釣りが行われている。海釣り公園では本牧が6時台と9時台の2回来園者のピークがあった。若洲では8時台に、川崎は10時台に来園のピークがあり、本牧を除いては比較的遅い釣りのスタート時間といえる。海釣り公園では他の釣り場のように真剣に釣果を狙っているというより、釣りに来ている過程や釣り場の環境を楽しんでいると考えられる。また、帰宅の時間として各公園とも14時～15時台（川崎は16時台も含む）にピークがあり、午後の釣れにくい時間帯になると帰宅する傾向がみえた。
- 4)来園構成：各公園とも2～4人で来園するケースが70%以上を占めた。逆に一人での来園は川崎の26%の他は少ない値となった。誰と来園したかという問いに対しては、本牧、若洲は64%が、川崎でも48%が家族と回答している。家族での来園は、父親と子供のパターンと両親と子供のパターンが多く、夫婦でという来園者も存在した。友人との来園者も各公園ともに20%程度存在した。このことから、釣りを楽しみながら、コミュニケーションの場としても海釣り公園を活用していることがうかがえる。
- 5)再来園者率：回答者のうち調査日の来園が2回目以上の来訪者は60～70%存在した。特に10回以上の来園に本牧で49%、若洲では36%の回答があり、再来園率が高いことが明らかとなった。
- 5)来園の理由：複数回答で来園理由についてたずねたところ、各公園とも利用性（近いから、施設が整っているから、駐車場があるから）、安全性（安全だから）、快適性（気軽に釣りが出来るから）に多くの回答が集まった。逆に環境の維持を示す安定性（釣りたい魚がいる、よく釣れる）に対する回答は極めて少ない結果となった。

これらの結果から、海釣り公園は設置の目的通り安全性、利用性を備えた公園として認識されていることがわかった。今後は海域の安定性を高めるためにどのような管理・運営を行っていくべきかを追求する必要があるだろう。また今まで港湾構造物からの海釣りと経済性との関係については余り検討されてこなかったが、今後検討の余地がある事項と思われる。

4. むすび

以上東京湾内の釣り場環境の現状を整理し、その問題点を明らかにしてきた。また家族連れや女性、釣り初心者等が求める安全性、利用性に富んだ釣り場環境が海釣り公園の設置によって実現していることがわかった。しかし、釣り技術のレベルや同伴者の属性によって求められる釣り場環境は異なる。魚影は濃い但他的活動と利用が重なる港内や沿岸道路等は施設面の整備が困難である。様々な条件下における釣り場に対し、ハード面からだけではなく管理・運営等ソフト面からの工夫も含めて如何に整備していくかを考えていくことが今後の課題といえよう。

参考文献

- 1) 戸谷仁 (1995)：空から見る東京湾の釣り1，日本テレビ
- 2) 戸谷仁 (1995)：空から見る東京湾の釣り2，日本テレビ
- 3) 橋口彰一郎 (1996)：最新防波堤釣り，永岡書店
- 4) 小畔泉 (1997)：'97 堤防釣り場126選ハンドブック，桃園書房
- 5) 土木学会編 (1991)：港の景観設計，技法堂出版
- 6) 丸田頼一他 (1989)：リゾート開発計画論，ソフトサイエンス社